
ラグナロク～オーディーンの願い～

ダン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラグナロク〜オーディーンの願い〜

【Nコード】

N5810I

【作者名】

ダン

【あらすじ】

ラグナロク、それは神々と巨人族の総力をあげた戦い。神々側の長であるオーディーンは決戦の直前、昔を思い出していた。北欧神話の神、オーディーンの昔話をお楽しみください・・・

緑がいつも茂り、清らかで純粹なる水が流れているその世界。下にある地上にいる者たちは神界と呼んだその場所、だがその場所は今や爆音・怒声…そして悲鳴で溢れかえっていた。

「復活してしまいましたか…」

神界中が見渡せると言われた高い木ユグドラシルで二人の神が話していた。一人は赤い髪に鬼の様な恐ろしい顔、その名はトール。雷神と呼ばれ、神々の中でも特に強い力を持つ神である。その手には今まで数々の戦を自らと共にしてきた神武のハンマーであるミョルニルを持っている。

「仕方あるまい。これも運命だ。」

もう一人は人間年齢で言うと二十代前半だろうか…。顔は若く、何かどこかの国の英雄のようなそんな雄々しい雰囲気がある。名はオーディーン。最高神の肩書きを持ち、神々の長でありまた神界を統べる者でもある彼は傍らにグングニルと呼ばれる神槍を立てていた。

「状況はどうなっている？」

「はい、状況はロキの一族が呪縛から解かれてから我が軍が劣勢となりつつあります。」

「他の神々はどうした？」

「頑張っではいますが…ポセイドン様が海の魔物、リヴァイアサンと、アテナ様が地獄の番人ヘルと、そしてそしてヘイムダルはあのロキと戦闘を開始したようです。」

トールが苦々しげな顔をしながら報告する。今や神界はロキ一族率いる巨人族とオーディン率いる神々の泥沼の総力戦となっていた。恐らくここに敵がくるのもそう遠い時間ではないだろう。

「オーディン様！」

不意に後ろから伝令役の神兵が大きな声を上げてやってきた。かなり慌てているようで拳動不審になっている。

「どうした？」

「ハッ、ミーミルの泉の近くでミドガルズオルムが現れました！突然の奇襲に我が軍は大ダメージを食らっております！さらにスルトも現れそちらは現在フレイ様が兵を率いて対応しております。」

ミーミルの泉とはユグドラシルの根元にある。その水を飲めばあらゆる知識を与えてくれるという奇跡の泉でこの泉の近くという報告は即ち、もう敵はこの近くまで来ているという事である。

「私はミドガルズオルムを討ちます。ヤツとは浅からぬ因縁もあることですし・・・」

「分かった。死ぬなよ？」

「すぐに戻ってきますよ。」

トールは一瞬だけ微笑むとすぐにオーディンに背を向けてユグドラシルの根へ戦う為に向かった。そう、二度と帰ることのない戦いへ・・・

オーディンはトールを見送ると上を見る。ユグドラシルの葉と枝が見えるその光景にオーディンは昔、自身がルーンの秘密を得るため

にこのユグドラシルでグングニルに突き刺された時の事を思い出していた。

「思えばあの頃は大変だったな・・・」

あれは美しい満月の時だった・・・どうしても力を得るためにルーンの秘密を知りたかった自分は神槍を自分の体に刺して痛みからその秘密を知ろうとした。

「ウグツ…ウウツ・・・」

痛い、だがこんな痛みになど負けられない。自分は力を得て絶対にこの神界の王となるのだ。それまではこんな所で死ねない。最初はそんな気持ちで腹にグングニルを刺した。

オーデインの腹から血が絶え間なく流れる。もう何日過ぎただろうか？血を流しすぎたせいで意識が朦朧としてもう時すら数えられない。

満月が自身を照らす。ただそれだけで腹の痛みが幾分かマシになった。この争いが絶えない神界でこの美しい満月だけが心に染みる。

なぜ自分はこんな思いをしてまで力を求めるのだろうか？地位の為に？誰にも負けない力を得る為？分からない。自分はなぜ力を手に入れようとしている？

目が霞む・・・オレはここで死ぬのか。フツ・・・情けない。所詮最高神と呼ばれようともこの程度か。

そこで不意にあることを思い出した。それはノルンと呼ばれる運命の女神の一人、スクルドが言っていた言葉だ。

「未来は無限にあります。それは悪い未来かもしれませんが。ですが逆もあります。過去に悪い未来だった人間が自分の力で良い未来に変えた事がございます。オーディン様もこの世界のより良い未来の為に頑張ってください。」

雲の下を見る。そこでは人間達が貧しいながらも幸せそうな笑顔でいるのが見えた。人間は貧しく、力も無いのになぜあんな笑顔でいられるのか？次に己に刺さっている武器を見る。神々の武器には個人の意思が宿っている。つまり、武器と心を通わせる事こそ武器の真の力を発揮できるのだ。

「汝、何の為に力を得る？」

ユグドラシルに吊ってから九日目の夜、声が聞こえた。それは若くもなく、かといって年老いた声でもなく、何とも微妙な声だった。しいて言うなら中性的な声だろうか。

「汝、何の為に力を得る？」

もう一度同じ質問が聞こえた。オレは・・・オレは・・・

「これからの未来が・・・たとえこの身が滅びようともその後の未来がより良くなる為にこの力を使う。」

それは最初に自分が思ってた事とは全く違う事だった。どうやらこの九日間木に吊らされてオレの気持ちも変わったらしい。

「了解した。この力、主と共に・・・」

そしてグングニルが光を放った。それと同時に自分の胸からひとりでにそれが抜ける。そして頭の中に全ての力が宿った気がした。

「・・・これから頑張るぞ。グングニル・・・」

「・・・様：様！・・・オーデイン様！！」

部下の声にオーデインはハッと我に返った。少し感傷に浸りすぎたらしい・・・イカンイカン。

「すまない。少しボーンツとしていた。で、どうした？」

「ハイツ、フレイ様がスルトに敗れました。そしてその空いた道から鎖を破ったフェンリルがすごい勢いでここに迫っております！！」

伝令兵の報告を聞いてオレはため息をつく。フェンリルか：お前は何を求めて力と憎しみに囚われるんだ？

ミドガルズオルムを倒しにいったトールは未だ戻らない。しかたないか・・・

「オレが出る。馬を用意しろ！」

オーデインはユグドラシルを降りる前にユグドラシルから見える光景を捉える。色々な所から悲鳴が上がり金属と金属がぶつかり合う音が聞こえる。

「武器たちよ・・・」

オーデインは言葉を放つ。それはまるで歌を歌っているかのような：また何かに語りかけているような、そんな透き通った声だった。

「オレ達はここで滅びるかもしれない。だがいつかお前達の願いは叶うだろう。それまでに今、この戦いを忘れるな。いつかお前達が現れる時、その主が素晴らしい者だった事を願おう。」

手に持っているグングニルに力を込める。お前とも今日でお別れかもな・・・

「お前も良い主に巡り会えるといいな。」

そしてオーデインは戦いに赴く。決して帰らぬ戦場に・・・そしてこの武器たちがいずれ戦い合う事も・・・

時が経ち、神界も何もかも無く荒地になったその地で槍が落ちていた。そこにやせ細り、ボロボロの衣服を纏った男が訪れる。

「槍か、お前も大切な主を失ったのか？」

そして槍は旅をする。同じく主を無くした者とともに・・・それが良い未来となるか、あるいは悪い未来となるか・・・それは誰にも分からない。

（後書き）

この短編はオレが昔、書いていた小説を短編にしたものです。この頃のオレは未熟で・・・まあ今も未熟なんです。小説の書き方が分からず四苦八苦しておりました。

飽き易い性格も合って放置した事も何度もあります。それでもこの作品は自分の中で一番の思い出の作品です。

ちなみにこの短編のテーマは「願い」です。願いが叶うなんてのは今の世の中、中々ありませんがそれでも叶って欲しいものです。

全知全能といわれたオーディンも叶いたい願いがあっただんですね。こういう所は神も人間も同じという事でしょうか？

それではまたどこかで会えるのを楽しみにしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5810i/>

ラグナロク～オーディーンの願い～

2010年10月21日23時44分発行